

「ア”あ……ッ！♡♡だめ……っ♡だめええ……！♡♡♡」

きついとばかり思っていた孔を、もはや容易<sup>たやす</sup>く雄茎は出入りしている。

ぐぼっぐぼっぐぼっ——♡♡

ぬるついた感触と、尋常でなく体内を割り拓かれる感覚とに、躰のあちこちに不自然な痙攣が走る。頭がおかしくなりそうだ。

すでに唾液は垂れ流しで、気持ちよさのあまり両目からもぼろぼろと雫が伝っている。もうお父に嫌われぬよう繕うどころではない。

「ほらッ、もっと速くできないの？鈍間<sup>のろま</sup>……ッ」

パンッ——

若い男の声と鞭の音が響き、さらに突き上げは激しくなる。

「あ”あぁッ♡♡あぁッ……♡♡あぁあぁあ……ッッ！！♡♡♡」

(だめ……ッ！♡もう……だめええ……ッッ！！♡♡)

穿たれるたび体内にかみなり<sup>かみなり</sup>はし<sup>はし</sup>が疾る。

強すぎる悦楽に今にも脳と躰が灼き切れそうで、この状況から逃れ<sup>のが</sup>たくも、柱にくくりつけられていはいはどうしようもない。